

# 学生が安心して学べるよう導くことの大切さ

留学生日本語別科 講師  
日本語教育学修士 佐藤仁美

授業を受ける学生の立場として考えた時、今回見学させていただいた授業からは数々の安心感が得られた。具体的には、まず教科書の難しい文章を中島総長先生がわかりやすくかみ砕いていたことだ。学生にとって身近な例を示しながら解説するので理解しやすく、また文章を読んだだけでは気づけないことにも気付けるようになる。難しく書かれた文章も、きちんと意味を理解して、納得して落としこめるという安心感につながる。次に、学生が論文を書けるようになるための材料を与えていることだ。どのような知識、どのような観点が、論文を書くために必要となるのか。その手掛かりを中島総長先生が与えることで、学生が1人ではできないこともできるようになっていくという安心感が得られる。

これらの安心感の理由は、中島総長先生が学生に対し目標に到達するための手掛かり、足掛かりを示していたことにある。学生に白い紙を渡してただ「書きなさい」というのではなく、何のために、今何をするのか、それをすることで何ができるようになるのか、明確で具体的な指示を与えていた。今すぐできる易しい作業から順に段階を踏んで鍛え上げられるよう学生を導いていた。

例えば教科書の読み合わせも、ただ音読をして終わるのではない。音読が終わった後で、今日取り組む論述問題を意識させながら、教科書の文章の中で特に重要な部分を指示し黙読させていた。課題で何が聞かれているのか、それに対し、資料のどこを読めば知識が得られるのか、中島総長先生は明確に案内していた。そうすることで、各自がじっくりと考えるための有意義な時間が作られていた。

また、個性のある解答を作るために複数の解答例を研究させるというしくみ作りも成されていた。1つの問題を考えるにあたって、ディスカッションを通して多様な視点からの考えを共体験することで、学生には応用力が身につく。

更には、教科書の文章や手本を引用して、つなぎ合わせる作業を行っていた。文を組み立て文章にするためには、文の意味を理解しなければならない。自分の頭で考えながら、論理的な文章を組み立てる経験を通して、内容の理解も深まり、文章を作り出す能力も鍛えられていく。そして授業で作った文章を教員が添削し、それを暗記するという、試験問題に対処する具体的な方策を与えていた。

実際、試験会場で試験に取り組む時、学生は自分の身一つで挑まなければならない。授業において教員が示す手掛かり足掛かりに導かれ経験を重ねていくことで、学生はひとりになっても問題を解くことができるようになる。また毎回の授業で自分にもできた、という確かな達成感を得ることで学習を継続していく意欲につながる。試験に合格するという目標を達成するために教員は授業においてどのようにして学生を導いていくことができるのか。今回の授業見学で学んだ具体的な実践方法を私自身の授業においても活かしていきたい。